

冒険者？いいえ農民で
す。- 凍結-

上やくそう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんやかんやでアサ次郎。こうなつちやもうTSUBAME斬るしかないっしょ、と今日も欠かさず太刀を振る。

我流独学なんのその。目指すはスーパノMINだ。

——オラリオにNOUMINぶち込んでみた。

#投稿に利用しているタブレットが充電できなくなったので凍結。

目次

百姓小童の日記、其の壺	1
百姓青年の日記、其の弔	15
…月！日 月下刀乱	35

百姓小童の日記、其の壺

○月○日 晴れ

ふと思いついたので、今日から日記でも書いてみようと思う。

筆を持てるようになってから早いものでもう四年程。今はもう八歳程になった。

俺の前世は日本人だ。あまり思い出せないけど。

けれどまあ、思い出さない方が幸せなのだろうと思っている。

知識とか、意味記憶的なのはバッチリと覚えていたのは幸か不幸か分からないが、若返って人生をやり直せるとポジティブに考える事にした。

現在は気がついたら赤子になって森にぽつんと一人あうあう言っていた俺を拾ってくれたおじさんと、他のおじさん達とおチビ達と一緒に山中の神社に住んでいる。

宮司さんとかでもないのに神社に住むなんて良いのだろうか、とも思ったけどおじさん達は神様だから寧ろ此処が住処らしい。

へえ。

……え？

冗談だろと思つたけれど、言われてみれば出会つた時から全く歳取つてないしなんか
凄い神々しいオーラを常に纏っているもんだから、そんなもんかと割とあっさり納得。
我ながら単純だと思うが、そもそも命の恩人を疑いたくはないものである。

俺を拾つてくれた神様のおじさんの名前はタケミカツチ。

おじさんと言つてはいるが、かなりイケメンだ。

甘いマスクではなくワイルド系のイケメンという感じだろうか。

羨ましいとは思うけど爆発しろオー！って程ではない。むしろ兄貴分が男前で誇らし
く思う。

そんなこんなで、普段は畑を耕したり山菜を採つたりして生活している。

かなり質素だが、景色も良いし空気が美味しいし、俺はこの生活を凄く気に入つ
ているのだ。

多分此処は日本だろうが、元現代人の俺としては電子機器が無いのはやはり不便さを
感じる事もある。

しかしタケミカツチさんやおチビ達と一緒に作業したり、蹴鞠や鬼ごっこなど自然の中で遊ぶのも中々に楽しいのだ。

うーむ、思考がちよつと老人っぽいな。俺こんな老成してたかな。

まあ今が楽しいからそれでも良いや。

俺は期せずして森ガールならぬ森ボーイになったのである。ふはは。

ところで、そんな俺の名前だが。

『佐々木小次郎』

NOUMINじゃないですかヤダー。

・月<日 晴れ

佐々木小次郎は劍豪である。

そして俺の名前も佐々木小次郎である。

ならばやることは決まったも同然だ。

修行あるのみ。

正直、おチビどもと遊んだり農作業するのも楽しいっっちゃ楽しい。

それこそお昼寝挟んで一日中ずっとそうしてられる位には。

だが今は修行する。

俺は希代の劍豪と同じ名前を何の因果か頂戴しているのだ。

男ならば燃えるなど言う方が無理な話だろう。

それに、俺が強くなって獣を狩れる様にでもなれば、食卓にお肉が増えるかもし

れない。これは大きい。

閑話休題。

さて、今日から剣の修行に励む訳だが。

『佐々木小次郎』と言って俺が真つ先に思い浮かべるのは某型月のNOUMINだ。
どんな攻撃もいなし、返す刀で瞬時に首を落とす。

そしてなによりあのチート魔剣。

物理法則なんざクソ食らえと言わんばかりに、人間の限界に思い切り中指をおっ立てるあの魔剣だ。

せつかく佐々木小次郎になったのだからアレは是非とも修得したい。

タケさんにこの世界の事を聞いてみたところ、「おらりお」なる場所には魔法もあれば

魔物もいるらしい。

……
行きたい……！

だがしかし、子供の俺がそんなことを言っても断られる事は火を見るよりも明らかだ。

ここはもつと成長して、実力を付けるまで我慢だ。

そうと決まれば俄然やる気が出てくる。

今の俺には普通の刀でさえまだ重くでかいが、ちょうどいい。

どうせ俺が使いたい、というか絶対使うのは某物干し竿。それに、長刀というのも中々にオツだ。

いよし、目指せ佐々木小次郎。

あ、俺佐々木小次郎だった。

&月一日 曇り

修行開始から二週間程。

真剣でなければ意味がないので、普通の鉄製の刀を神社から借りて修行だ。タケさんには渋られたけど、鞘付きで振るならとOKされた。

通常の長さの刀とはいえ、まだ子供の俺にとっては十分に長い。早く様に成りたいものだ。

まあ本家の方も独学、決まった構えを持たない我流の剣術だったようだし、焦ることはない。

途中で遊びに来るちびっこ達を構いながら、農業の合間に時間があれば即修行。

迅く、鋭く、しなやかに。

あまり筋力を鍛えようとは思っていない。

そもそもガキが腕力で刀を振ろうなんて愚行である。

俺は唯々、とにかくひたすらに技術の向上に努めるのみ。

タケさんに見てもらった所、「俺も武神のはしくれだ。剣術も当然収めちやいるが、小次郎程の奴は見た事ないな…」と言われる位には俺に剣術の才があるらしい。何それ凄い。

ただまあ、評価は嬉しいけどそんなものは眉唾だ。

…
嬉しいけど。

しかし、やればやる程夢が膨らんでくる。

アニメや漫画のキャラの真似とかしながら修行するのも楽しいし、強くなったら何しようかな、と想像しながら修行するのもまた楽しい。日本刀を見てると卍解したくなるのは仕方のない事なのか。

ああ、それにしても早く俺が狩ったお肉を使って皆と鍋でも囲みたいものだ。

よし、がんばるぞ。

%月||日 雨

子供を拾った。三才位の女の子だ。

「命」^{ミコト}と名を付ける事にした。

タケさんに保護できないか頼んだら即OK。さすがタケさんだ。

だけど面倒はお前が率先して見ろよ、とタケさん。

その後にもちろん俺も精一杯手伝うけどな、と言ってくれたので正直助かる。

まあ、先程から俺の甚兵衛の袖を離してくれないので俺が世話する事になるんだろうな、と思った。

(☒ ☒ ☒) スヤア月#日

久しぶりに日記をつける。

俺は十歳程になった。程、というのは自分の年齢を詳しく知らないからだ。

最後に日記をつけてから二年。

命は俺の後ろをいつも「にいさまー」と言つて、とてとて付いてくる様になつた。

……
超かわええ。

← 最近はや桜花達と遊んだり農業したりしながら、毎日毎日修行の日々だ。

← 明朝起床、メシの下ごしらえと畑にて野菜の収穫

← 皆の朝食作り

← 朝食

← 鍬を手に農作業。おチビ達と遊ぶか、時間があれば鍛練

← 昼食

← おチビ達が昼寝している間に鍛練

起きたおチビ達と遊ぶ

←

夕食

←

畑にて鍛練。偶に来るイノシシと戦闘

←

オフトウンにぶつ倒れて爆睡

こんな忙しい生活を送っていて日記を書く時間が取れなかった。

まだまだ未熟だが、畑を荒らすイノシシの突進を抜き身の刀で傷を付けずいなせる程には成長した。

最近はいノシシと刀を使って闘牛ごっこをするのがマイブームである。

手首や肘などの関節を柔らかく使うのがポイントだ。

そういえばこのイノシシも大きくなってきたので、そろそろ食べることにした。

某ゾル○イック家の肢曲のようにゆらりゆらりと歩いて誘う。

突進してきた所を左へ摺り足。

体を風車に見立てて、鞆の鐙をイノシシの鼻先に当て、突進の威力を殺しつつも勢いを借りて回転。そのまま抜刀、すれ違いざまに首元を一閃。

イノシシは突進したまま、刀を鞆に収める音とともに崩れ落ちた。

刀に血は付着していないけど、イノシシの首から血がすごい流れ出ていた。

やはりまだまだ未熟だ、精進せねば。

イノシシの肉は確か**牡丹**^{ぼたん}、と言ったか。

寝る前にこいつを捌いて、血抜きもしておこう。

防腐処理もしておかなければ。

明日は牡丹鍋だな。楽しみだ。

@月\$日 晴れ

この前日記をつけてから、更に二年。十二歳程。

牡丹鍋は週に何回かは食卓に並ぶようになった。

鍛練はもはや気付いたらいつの間にか刀を振っているレベルだ。

練度はせいぜい森の中で落ちる落ち葉を三枚くらいは地につくまでに真ん中を真つ二つにできる程度。

足りない、まだ未熟。

修行を初めて早四年。

もちろん、皆との団らんも忘れてはいない。命や桜花達ともちゃんと遊んでいる。

そういえば最近、新しく遊ぶ友達が出来た。

サンジヨウノ・春姫ちゃんという娘だ。

この春姫ちゃんなのだが、狐耳である。

狐 耳 で あ る

初めはびつくらこいた。ぶったまげたと言ってもいい。

いくら燕返しを目指しファンタジーなオラリオへ行くために日々技を磨いているとはいえ、現物で生物学的にファンタジーな女の子を見ることになるとは。

タケさんに聞けば、オラリオにはこんなケモミミな人達がわんさかいるのだという。

ますます、オラリオへの興味が深まるばかりだ。

一回はオラリオに行ってみたい。そのためにはもつと技を磨かねば。

百姓青年の日記、其の弐

@月：日 晴れ

今日も今日とて鍛練鍛練。

と思つて畑に行つたらクソでかくてオーラのモノを纏っているイノシシがいたので斬り捨てといた。

大分強くて時間がかかりそうだったので森の奥まで誘い出して斬った。

一撃受けると即死なので、刀で受け流していたが刃こぼれしてしまった。泣きたい。

恐かつたけど、それ以上に楽しかつたんだよなあ。

ちようどそこらの獣では物足りなかつた所に出てきてくれて、いい腕試しができた。

願わくば、人型の相手と戦つてみたいものだ。

大きかつたから肉を燻して保存しとこうと思つただけど、なんか霧散した。どういふこつちや…。

昼過ぎになり、畑仕事を早めに終わらせてまた鍛練しようと社に戻ると春姫ちゃんが命たちと遊んでた。

春姫ちゃんは社には住んでいない。

じゃあ何処に住んでいるのか、となんとなく聞いてみた。

なんでもこの山の麓にある武家屋敷に住んでるらしい。

えっ、あそこ大分大きくなかった？

案の定、春姫ちゃんは貴族でした。

なんでも、代々神様に仕える家柄なんだとか。

俺が言う事じゃないけど、仕えられてる神様側タケさん達がボンビー生活ってどうなんだろう
か。

本当は家から出ちゃダメなんだけど、命たちが連れ出してるんだとか。ソレ箱入り娘じゃないですか。

というかあの警備がついてる屋敷から連れ出すとかどんだけー、と思い命たちを
問詰めたら、神様達にこっそりニンジャ的な事を教わっているらしい。

何それ知らないんですけど…。

妹達に一人だけハブられているという事実には割と本気で落ち込んでいて、命が慌てて恥ずかしそうに事情を話してくれた。

なんでも、強くなつて俺を驚かせたかったらしい。ぐうかわである。十分に驚かされてしまったぜ。

……え、恩恵？お前らそんなの貰ってんの？

@月T日 晴れ

——こちらスネーク、潜入に成功した。

命たちだけじゃないので俺も潜入する事にした。スニーキングミッション開始だ。

：別に俺だけ「恩恵」とやらが貰えてないから八つ当たり気味に来たわけじゃない。断じて違う。

命達から話を聞いた後、ジト目でタケさんを睨んでも何も無かったから怒ってる訳でもない。

気分は伝説の傭兵。足音を立てず、するすると春姫ちゃんまで接近。

まだお姫様だっことはキツイので春姫ちゃんを肩車して脱出。なにこれ超楽しい。ほらみる、俺だってこんくらい出来るわボケえ！恩恵なんてなくなつてできるし。

春姫ちゃんは終始俺の上ではしゃいでいた。

社に着くと、近くの川で皆で遊んだ。

因みにその時、俺一人で行った事を命に怒られた。何故だ。

皆が疲れてお昼寝してる時に修行しようと立ち上がったら春姫ちゃんが起き

ていたらしく、お話ししようと言ってきた。

鍛練も欠かせないけど、春姫ちゃんを無下にする程でもない。

春姫ちゃんはおとぎ話とか童話とか、そういうのが好みらしく、俺が知っている限りの物語を春姫ちゃんに話した。

…調子に乗って話しすぎてしまった、やばい。

この世界には桃太郎とか一寸法師とかあるんだろうか。

まあ、もしなくても適当にごまかそつと。

@月≡日 晴れ

うえええええい（ ^ ω ^ ）ノシ↑刀

今日も変わらず修行である。

いや、変わった事もある。最近は居合斬りでそこらの樹や竹をスツパリ切れる位には成長した。順調かどうかは分からないけど、まあ上達はしているのだろう。

命達がステータスを手に入れてからというもの、なんと彼奴らが模擬戦の相手をしてくれている。

いや、前々からずっと人と手合わせしてみたいと思っていたので助かった。

と思つてワクワクしながら命達と模擬戦をしたんだけど――

――ちよ、お前ら強すぎねえ…？

命、桜花、千草の三人纏めてドヤ顔で

「かかつてこいよ」(くく、く)「的な事言つてたら普通に負けた。

いや、マジで最後まで押されてた。

恩恵凄すぎでしょうよ…。

お前ら恩恵しなくていいよ…。けいおん！してろよ…。

まあ、ならお前何で恩恵受けないんだって話なんだが、俺が恩恵を受けないのは一応ちゃんと理由がある。

確かに、彼奴ら三人が恩恵を受けて俺が受けられないって事は無い。

…無いよね？

恩恵を受けて「ステイタス」なるものをゲツチュすれば、三人みたいに変態的な挙動も可能になって、更に強くなれるだろう。

——だが。

俺の今の目的はあくまで剣技の上達、燕返しツバサ返しの修得、オラリオへ行くこと。この三つだ。

三つ目の「オラリオへ行く」ためにはどっちにしてもステイタスが必要なのだが、今の俺には必ずしも必要という訳ではない。

そして何より、俺には確信があつた。

——ここでステイタスを取得すれば、俺は其れに驕り、刀を疎かにする、と。

これは俺に限つた話だ。ステイタスを取得しても、全く鍛練を怠らず、技を磨き続ける人も勿論いるだろう。

だが、俺にそれが当てはまるかどうかは分からないのだ。今まで通り剣に励んだとしても、必ず何処かで今の必死さを忘れてしまうと思う。

「恩恵」は「神の力」だ。アレは人間を超える力だ。

ドラゴンと戦う戦士の様に。

鬼に挑まんとする武士の様に。

佐々木小次郎は人間の弱さを忘れてはならない。

俺が鍛えんとするのは、脆弱な人の身で遥か格上の存在の猛攻をいなし続けられるモノ。

数値で決まる単純な力で強引に破壊するのではなく、果てしない自己研磨の末にのみ得られるモノ。

即ち、業わざなのだから。

あ、あ、それっぽく言ってみただけどステイタス欲しいわ。

・月A日 曇り

十五歳くらい。年齢を数えてない。

最近では彼奴ら三人の攻撃も割と余裕を持って捌けるようになってきた。

それでも結構ギリギリだが。

それはともかく。

社の生活が苦しくなってきた。

いや、俺が命達より弱くて精神的に苦しいとか、そういう話ではない。

単純に金が足りなくなってきたのだ。

つちゅーか天照様も凄いなんだから、どこかから搾り取れば言いのに。あんな美人なんだから朝飯前だろ。

まあそれをしないから女神様なのだろうが。

閑話休題。

このままじゃやべえ、という事で、皆で働く事になった。

ぶつちやけ、畑仕事と家事全般と狩りと鍛練をやつてる俺にこれ以上何を求め
んだつて言いたいけど仕方ない。

修行がやりたすぎて禁断症状が出るレベルだけど、家族の生活にや代えられんのであ
る。

あー、気が重い…。

・月≫日 晴れ

やばい。

俺は天才かもしれない。

凄い事を思いついてしまったのだ。

金を稼ぎたいならオラリオ行けばいいジャン！と。

却下された（；ω；）ブワツ

・月#日 雨

昨日は「あわよくばオラリオ行けるかも作戦」が開始二秒で頓挫した事に枕を濡らしたが、考えてみれば当然だった。

俺はともかく、ちびっ子どもはまだ十歳そこらなのだ。

けど、そんなこと言ったら俺は何時オラリオへ行けるのだろうか。

俺はもう十五程だ。高校生くらいの年齢だ。

できる事なら早く行きたい。まあ焦っても仕方ないけれど。

で、だ。ここからが本題。

オラリオの外にも魔物というものは跋扈している。

ダンジョンの魔物と比べるとかなり弱いらしいが、それでもステイタスを持たない一般ピーポーには十分な驚異である。

で、そんな魔物を討伐すると結構な額が稼げるのだとか。

俺へキタコレ

こんな感じだった。

なので、俺の役割は

・家事全般

・畑仕事全般

・狩り全般

・魔物討伐の依頼的なものがあれば斬りに行く

ひとまずはこんな感じで決定。更に、これらすべてにプラスして（十合間に鍛練）が入る。

ちよつと俺への負担が頭おかしい事になつてるけど、そもそも鍛練が趣味でやつてる事だからしゃーないのである。

依頼を探しに町へ降りるのは明日からだ。がんばろう。

・月／日 雨

鬼が出た。

おに、と書いて鬼オウガと読むらしい。

鬼と言うからにはイノシシより強いんだろうけど、さてどうなるか。

けどオラリオの外で大分弱体化してんだろうなあ…。

だが鬼は人型。つまり、剣の腕を試すにはもってこいなのである。

鬼つつつても災害レベルが鬼とかそういう感じじゃないだろうから、まーなんとかなるっしょ。

ぐつはああああああああ腕折れたあああああああ（　ゝ　ω　ゝ　）
やつべえ倒せないかと思つたわ。

強い、堅い、でかいの三拍子揃つてました。

まあ隙見て両目と口内刺したらなんとか倒せた。

力では圧倒的にあちらが勝つていたが、俺の目標通り「受け流し」はかなり良い線行つてゐるんじゃないだろうか。一発避けきれなかつたんで左手捨てたけども。

やっぱりまだまだ話にならない。こんなんではド素人もいい所だ。もつと精進しなければ。

激痛で動けなかつた所を、心配して様子を見にきてくれた三人に介抱されながら

帰った。

もうステイタス取るまで魔物討伐禁止された。ですよねー。

△月<<日 晴れ

——こちらスネーク、潜入に成功した。

スニーキングミッション開始だ。

気分は伝説の傭兵。足音を立てずに、するすると以下略。

別に腕折れたから刀振るなって言われてても春姫ちゃんと遊ぶなどは言われてねえしい？（ゲス顔

よく考えたら仕事もせずに遊びに耽るクズ野郎である。けど腕折れてるからね、仕方ないね。

慣れた手つきで春姫ちゃんの部屋に入ると、包帯ぐるぐる巻きの腕を見て春姫ちゃんが驚いてた。

春姫ちゃんをお持ち帰りしてると、屋敷が騒ぎになっていた。どうやらバレたよ
うだ。

春姫ちゃんが帰ったら怒られるかもしれない罪悪感がちよつと湧いた。ゴメン
ね。

二人でお喋りしたりかくれんぼしたりして過ごした。

何処の国でも美少女の笑顔は最高である。

∴月！日 雨

もう十八かそこらになる頃だ。命が十一になったからその位だと思う。

鬼に腕折られてから、畑仕事と家事と鍛練だけをしている。もうとつくに完治して元氣バリバリなのに。

出稼ぎくらいは任せてくれと皆に言われちゃしようがない。

そろそろ森の落ち葉を全部真つ二つにできるようにはなってきた。

鍛練もいいけど、最近春姫ちゃんの顔を見ていない。よし、潜入するか。

「そうだ、京都に行こう」的なノリで貴族の屋敷に不法侵入である。

部屋に行っても春姫ちゃんはいなかった。最早顔馴染みとなった屋敷の仲居さんに聞くと、春姫ちゃんは勘当されてもういないという。

(っ・エ・、) ……
???

詳しく事情を聞くと、屋敷に泊まっていた客人——パルウム小人族の役人——の天照様に捧げる品物、神饌しんせんを春姫ちゃんがこっそり食べた事に春姫ちゃんの父親が激怒、春姫

ちゃんは勘当され、その役人に引き取られたのだという。

…ふうん（海馬風）

疑いたくはないけど（春姫ちゃんを）、彼女は間違つてもそんな事をする子ではない。そもそもそんな度胸がない。

そんな事したら、ぶつちやけ挙動や尻尾と耳の動きで丸分かりになると思う。

こう、ずっとソワソワしながら元の持ち主の方をチラチラ見て、目を合わせられたら勢いよく真逆を向いて、尻尾と耳は常に彼女の心を表すようにビクビクしつぱなし。

盗んだ物はずっと後ろ手に隠してて、挙動不審で不自然極まりない。

多分、いや絶対にこうなる。

もし他人にこんな印象を与えておいて、自分を容疑者から外す様に企んでいたら大したモノだ。

けど、春姫ちゃんはしない。できない。

他人の物を盗む、なんて考え方は多分彼女の頭の中には存在しないと思ってい

る。

つーか神饌ごときが原因で俺たちの幼馴染を取られてたまるか。

だからこのままいなくなるってのはちよつと頂けないのである。

役人の住む町まで八里ほど。

聞けば、春姫ちゃん達が屋敷を出たのは昨日の夜。

今は未の刻。

…ちよつとやる事ができたなあ。

「おお、お帰り小次郎——何かある。いや、あつたつて顔だな」

「おう、構わんが…何でまた。お前さん、あんなに遠慮してたじゃねえか」

「———そうか。…：…おう、気にすんな。お前の思う通りにやればいいさ。なに、俺も責任は取る。心配するなつて」

…月！日　　月下刀乱

月光の下。涼やかな風が若葉を撫でる。

がたごと、と煌びやかな装飾を施された馬車が揺れる。

舗装もろくにされていけない山道を春姫を乗せた馬車の一行は進んでいた。

(どうして、こんな事に……)

中央の護衛付きの馬車。

そのそれなりには広い部屋の中で春姫はぼんやりと考えていた。

なぜ、自分はこんな所にいるのか考えてみる。

——最後に彼等と遊んだのは何時だったか。

ただ毎日を一日前と同じように過ごす日々。そんな自分を見ていられないとばかりに無理矢理連れ出してくれた彼等。

始めはその強引さに強く戸惑ったのをよく覚えている。

しかし彼等はそんな自分など御構い無しに、太陽の様に笑いかけながら連れ回し

た。

連れ回して、くれた。

あの頃から、自分の世界が広がった。

まるで空を照らし出す太陽のように、彼等はいつのまにか春姫の心にかかっていた雲を晴らしてくれた。

——— そうですね、あの少年は初めて会った時に、「何故私も誘わなかったのだ」と拗ねていたっけ。

幼馴染の一人、いつも自分に、自分の知らない面白い物語を語ってくれる少年の事をふと思ひ出し、春姫はほんの少しだけ可笑しい気分になった。

「彼」は年不相応にとても大人然としていて、いつも春姫達を優しく面倒を見てくれるのに、こういった所で子供らしさを見せるのだ。

初めて会った時だって、命達三人が春姫を連れ出すという計画に自分だけ仲間はずれにされていたとその端整な顔に少しだけ眉を寄せてぶつぶつと言っていた。

彼はいつも春姫の知らない物語を語ってくれる。

知り合つて間もない頃、口数の多い方ではない彼に少し距離を感じていた春姫に、彼は自分から話しかけて来てくれた。

そして春姫がおとぎ話や童話が好きだという事を話すと、色々な話を聞かせてくれたのだ。

熊と相撲して打ち勝つまさかり鉞を担ぐわらべ童の話。

鬼に挑む三匹の獣を引き連れた武士の話。

小さき身でありながら、遙か強大な鬼を倒す小人の話。

どれもこれも初めて聞いたものばかりだった。何処でその物語を知ったのかと聞いても、「さて、何処でだったか。最早覚えておらん」と言うだけだった。

——彼はいつも刀を振るっていた。

まるで何かに急かされる様に、どこか遠い所を見つめながら。

それが物語に出てくる英雄を目指している様に自分には見えて。

本当に自分の手が届かない遠い場所へ行つてしまいそうで、恐かった。

だから春姫は社に訪れた時、決まって彼と遊んだ。

彼がいつの間にか何処かへ行つてしまひそうだったから。話すのはあまり得意ではないけれど、勇氣を出して彼に声をかけた。

それがどうだ。遠くへ行つて欲しくないと願つていたのに、今春姫は自分から彼等から、今まで生きてきた自らの家さえ離れてこんな所まで来ている。

自業自得なのは分かっているが、とてもやりきれなかつた。

「どうかしたかい?」

表情に出ているのだろう、ふと春姫を心配する声がかげられた。

顔を上げると、小太りした小人族バルウムの男性が此方を伺つていた。

年の頃は三十そこらといった所だろうか。

「い、いえ……なんでもありません」

「そうかい?」

勘当され、本来ならば行く当てですらなかつた自分の事を拾つてくれた春姫の「恩人」だ。

「大丈夫。何も心配はいらないよ。お父上に代わつて、春姫ちゃんはボクが守つてあげるよお」

だが、理由は分からないが春姫は今の彼が浮かべる笑みが苦手だった。嫌い、と言つてもいい。

あの視線を向けられると、何故か背筋が寒くなる。

根拠などない。故に春姫は「自分がおかしいだけなのだろう、恩人にそんな事を思うなんて失礼だ」と自分を無理矢理納得させた。

引き取つて貰い、これからこの人の所で新しい生活を送るというのに、春姫は自分の事を連れ去られる奴隷のようだ、と思つた。

——あそこ（彼の神社）に帰りたい。

今になつて無性にそう思う。

初めて出来た友人だった。

家が嫌いという訳ではない。父はとても厳しかったが、ちゃんと自分を大切にしてくれた。それは分かつた。

だからこそ春姫（自分の娘）が客人の神饌（しんせん）を食べたと知つた時、あれだけ激怒したのだろう。父は神に仕える仕事に誇りを持つていたから。

自分に勘当を告げる父の顔が感情を読み取らせない淡々とした声とは裏腹に、きつく歪んでいたのを覚えている。

それが自分と別れる事への悲しみの顔だと何となく分かった時、春姫は嬉しかった。

……これでは本当に連れ去られているみたいだ。

——ああ、神様。わたくし 私が悪い事をしたのはわかっています。この先何年掛かろうとも構いません。どんな事も致します。
ですから、ですからどうか——

(……わたくし私は何をしているのでしよう)

見苦しいにも程がある、と春姫は自分の考えを恥じた。
そう、心配はいらないのだ。

相変わらず男性の粘つく視線が不気味に春姫を舐め回すが、春姫はこういうお人なのでしよう、と我慢した。

「もうすぐだよ春姫ちゃん。ボクのお家に帰ったらいっぱい——」

と、小人族バルウムの男性が話し始めたその内容に春姫が言い知れぬ不安を感じ始めた時。

ズドンツ!!

地を揺るがす轟音と共に、春姫の乗っている前の馬車、さらにその前を進んでいる護衛ヒューマンの人間達から悲鳴が上がった。

「……………」

「なツ、お、おい何事だ!?!」

小人族バルウムの男性が騎手に叫ぶ。

「わ、わかりません! 前の馬車の更に前方で何者かと戦闘を行っている模様ですが……!」

「くそ、おいお前! 見て来い! ……春姫ちゃんはボクが守るからね、心配しないでねえ」
護衛の一人に怒鳴った後、猫撫で声で話しかけてくる。

怒鳴られた護衛が様子を見に行こうとした直後、先頭の馬車を吹き飛ばしてソレは現れた。

『グオオオオオオ!!』

「う、うわああああああああ!!!」

（鬼オウガ）

鬼メドル。3 Mはあるのかという巨体がその豪腕で以って屈強な護衛達を羽虫を払うかの様に吹き飛ばす。

「困め! 数で押すんだ!!」

護衛達のリーダーらしき人間ヒューマンが叫ぶ。

それを皮切りに、次々と護衛達が鬼へと殺到した。

「は、ははは………なんだ、モンスターも大した事ないなあ!」

小人族の男が高みの見物を決め込み、馬車の中から鬼へ嘲笑を浴びせる間にも攻撃は止まない。

劍、太刀、槍、弓矢。

ありとあらゆる武器を用いて鬼へ群がり、滅殺せんと攻撃を浴びせかける。

太古の狩りの様に獲物を取り囲み、皆が果敢に立ち向かうその光景はさながら鬼退治だった。

英雌人間による怪物の撃退。それが今成し遂げられようとしていた。

だが、

『グオオオオオオアアアアアアアアアア!!!』

「がああああああああ!!!?」

忘れてはならない。

怪物を退治するのは人間だが、人間を蹂躪するのはいつの世も怪物だという事を。

そして英雄という称号は、極一握りの存在にしか与えられる事は無い。

不運な事に、此処に英雄その器はいなかった。

受けた傷を倍にして返すと言わんばかりの鬼の暴れ様に、春姫の視界で今まで優勢だった護衛達が面白い様に吹き飛んで行く。

『グオオオオオオオオオオオオ!!!』

そして、五十人強い護衛達は瞬く間に半分以下に減らされた。

腕や足がおかしな方向に曲がっている者。

木にもたれかかり顔を俯かせピクリとも動かない者。

倒れている者は皆一様に鎧を砕かれていた。

「……………な、なんだ、これは」

わずか一分足らずにして形勢逆転どころか壊滅状態にまで追い込まれた惨状を前に、小人族の役人が呆然と眩く。

春姫もまさかここまで力の差があるなんて信じられなかった。

「……………く、くそおおー！こんな所で死んでたまるか！こつちに来い!!」

「きやあつ」

突然、バルウム小人族の男が春姫の腕を掴み強引に外へ引きずり出した。

バルウム小人族とはいえ大人の男に強く腕を引っ張られ、春姫の細腕が悲鳴を上げる。

「い、痛いです……………!」

「くそ、くそ！役立たず共め!!あんな奴一匹なんで早く殺さない!!クビにしてやる!!!」

春姫の腕を引っ張ったまま、男は鬼とは逆方向に走り出す。

主の身を守らんと鬼へ向かって行く護衛達を「邪魔だ!!」と怒鳴りながら掻き分け、と

行った。

男に突き飛ばされた春姫は鬼の前で転んでしまう。

(あ……………)

着物を乱れさせながら此方を見上げる春姫に、言葉を持たぬ化物にも何かそそられるモノがあつたのか、黄ばんだ不揃いな歯の並ぶ口を三日月に裂けさせる。

『グウウウルルウ……』

握られれば春姫など小枝の様に折られてしまふであろう鬼の手のひらが春姫の矮軀を捉える直前。

「———そこまでにしておけ。その女子はおなご貴様の触れていい者ではない」

しやらん、と涼やかに響く鈴の様な声。

春姫の前に着地した人影から放たれた銀閃が鬼の腕を奔った。

『———?』

鬼は何が起きたのか気づいていない。

春姫も余りに自然過ぎて、違和感がなさ過ぎて、気づくの遅れ、そしてそれに気づき絶句した。

——ぼとつ

鬼の腕がいつの間にか斬り落とされているという事に。

『——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!?!?!!?』

絶叫。

鬼は無事な左腕で斬り落とされた右腕の手首から下を掴みながらのたうちまわる。

「貴様は其処で踊っているが良からう………ささて、捜したぞ春姫。無事か？」
再び春姫の耳に届く雅な声。

流水の如き動きで刀を鞘に収めた少年は、ゆっくりと此方へ振り返った。

(あ、ああ——)

間違ではない。幻ではない。

春姫はやつと現実を認識した。

「今のお主の愛らしい顔を楽しむのも一興だが、生憎そうもいかぬ様だ。立てるか？」

「——小次郎、さま」

まるで物語の英雄の様に現れた、佐々木小次郎「彼」が自分を助けに来てくれたのだと。

小次郎は呆然とする春姫の手を優しく取り、ゆつくりと立たせた。

「あ、あのつ、何で、ここに……」

未だ状況を詳しくは認識しきれていない春姫がしどろもどろになりつつ小次郎に尋ねる。

春姫自身もう何が何だかわからなかった。状況と本人の言葉からして、どうやら小次郎が自分を助けてくれたらしい事は何とか理解できたが、それだけだ。

そもそも何で春姫が此処にいるのを知っていたのか。

明らかに人間業ではないさっきの攻撃は何なのか。

どうやって春姫に追いついたのか。

「……………」

かちやり、と静かにしかし隙を伺わせずに、それでいて早い動作で小次郎が背負った刀を抜刀。

構えは無い。

切先を地面より僅かに浮かせ、戦う意志など全く無いかのような自然体だった。

『グウアアアアオオオオオオオ!!!』

それが鬼の氣に障ったのか、雄叫びを轟かせながら鬼は小次郎へと突進した。

剛風を逆巻く鬼の腕。

軽く小次郎のソレの五倍の太さはあるうかという大木の槌の如き一撃が彼に直撃するその刹那、瞬きすら追いつかぬ速度で小次郎の姿が掻き消えた。

(——え)

傍で見ている春姫が驚愕の声を漏らす間もなく、虚空で複数の銀の閃光が煌めく。

ざつ、と草鞋を擦らせ鬼の背後へ現れた小次郎が刀を——付いた血を飛ばすように——振った直後、鬼の両の腿、左手首、鎖骨の辺りから血が噴出した。

「む……流石に硬いな」

呟く声には隠しきれない不満が籠っている。

しかし、それがどれだけ卓越した絶技なのかは語るまでもない事だった。少なくとも春姫では視認すらできなかった。

『グウアアアアオオオオオオ!!!』

二度も自分の体につけられた鬼が怒り狂う。

負傷した患部に厭わず小次郎へ叩きつけられる怒濤の拳。

ただ叫び、ただ振り下ろし潰す。まるで発狂する獣のようなだけのそれはシンプルであるが故に人間の恐怖を最も掻き立てるだろう。

だが。

そんな俗物じみた感性をこの佐々木小次郎劍士は持っていないかった。

「は、暖簾に腕押し、という諺を知っているか？ 鬼よ
するり、と。」

モンスター鬼の全力を以て振るわれた渾身の一撃を、佐々木小次郎は刀身に拳を滑らせ、いとも容易く受け流した。

轟音。

地面を蜘蛛の巣状に粉碎させて鬼の拳が一瞬停止する。

その隙を見逃す小次郎ではなかった。

間髪入れずに首を落として刀を振るう。

『!!』

しかしタダでやられる鬼ではない。

鬼の体軀は3Mはある。その首を落とすためには、小次郎の背ではどうしても跳ばねばならない。

強引にしゃがみ小次郎の刀を紙一重で躲す。

そして空中で無防備な小次郎の体へ、アッパーカットを繰り出す。

「——シッ!!」

小次郎は瞬時に体と拳の間に斜めに刀身を滑り込ませ、またもいなす。

拳の勢いを殺しきれなかったか、小次郎の体は空中で独楽の様に回転した。

しかし小次郎は逆にその回転を利用し、突風の如き疾さで鬼の首を落として——

『グオオオオオオオオオオオ!!』

「ぬ——!!?」

突然横から叩きつけられた別の拳の直撃を受けて吹き飛んだ。

「こ、小次郎さまあ!!」

木の幹に叩きつけられる小次郎を見て春姫が叫ぶ――

『ガアアア……!』

――ぐりんつ、と思い出したように二匹の鬼が春姫の方を睨みつけた。

バレた。

「あ……………」

呼吸が止まる。

息ができない。

二匹の鬼様物の視線に射すくめられれば、若干十歳の少女に絶大な恐怖を与えるには十分すぎた。

がたがたと怯える狐人キツルの少女の姿に満足したのか、鬼がゆつくりと腕を振り上げたその時。

かこん

投げつけられた鞆が鬼の後頭部に当たり、間の抜けた音が聞こえた。

「???

鞆が当たった方の鬼が怪訝そうに振り向き

「風三連」
おろしせんれん

——刹那閃く三筋の剣閃。

その神速の突きに鬼は両目と半開きにしたままの口内奥を瞬時の内に串刺しにされた。

ドドドツ!

遅れて音が響く。

着地した小次郎が刀の血を飛ばすと同時、鬼はゆっくりと倒れ伏した。「死合いの最中に背を向けるとはな。随分と舐められた物だ」

言いつつ、小次郎が春姫を庇うように春姫と鬼の間に移動する。

唄うような口調とは裏腹に彼の体は傷だらけだった。

もともとガタが来ていたのだろう。先の一撃によって刀は半ばから折れ、頭部からは血が河のように流れ出ている。

鬼が唸る。

今しがた斃した鬼は最初に小次郎が右腕を斬り落とした方だった。

つまり、残った鬼に傷らしい傷は与えられていない。

「ふッ！」

『ガアアアアアアッ!!』

そんな自分の体には目もくれず、再度激突する両者。

振るわれる剛槌。 閃く刀身。

交差する互いの武器が火花を散らす。

技と力の正面衝突。

怪物は圧倒的な力をただ振り回し、剣士はその技量で以て巨大な拳を受け流しつつ、隙あらば首を落とさんと眼を光らせる。

数分後には自分が殺されているかもしれない状況で、春姫はその光景に魅入られた。

仄暗い月明かりの下。森の中、鬼へと挑むその背中をさながら物語の中の英雄のよう。

周囲が少し明るいのは気のせいだろうか。

何故彼はそこまで傷を負いながら、自分より強大な相手に挑むのか。彼の疾さならば、傷を負っていようと逃げる事は出来るはずだ。なのに何故？

決まってる。

(私が、いるから……?)

そう、それに他ならない。

小次郎が分の悪い勝負を続けているのは、ひとえに「春姫を背にしている」からだ。

それが分かった時、春姫は情けなく思う気持ちと同時に、嬉しかった。

小次郎英雄が自分お姫さまを助けてくれ——

(な、なな何を考えているのでしょうか……!ふ、不謹慎なっ!)

サツと木陰に隠れ両頬を抑える。本当に何を考えているのだ。彼が英雄なのとはもかく、自分がお姫さまなどとは自意識過剰にも程が有る。

(……って、そうではありませんでしたっ!)

今も小次郎が戦っている傍らで何を呑気に考えていたのか。こちらの方が不謹

慎ではないか、などと考えている内に戦闘は佳境に差し掛かっていた。

『グオオオツツ!!』

「む……………っ!」

小次郎にいなされ地を打ち据えた拳が地面を破壊し、砕けた瓦礫が飛び散った。

(あ—————)

その礫を背中に受け、小次郎が前につんのめる。

「く……………!」

完全に無防備。

小次郎の体には今、一ヶ所として自由になる部分が存在しなかった。

引き伸ばされる時間。

落ちる葉さえゆつくりと映る春姫の視界の中で鬼が無情にも腕を振りかぶる。

—————春姫は気づかなかつた。己の体が淡く発光している事に。

(……………や、だ)

小次郎が目を瞑る。それは恐怖故か、それとも諦めか。

どちらにせよ、春姫にはそれが小次郎が自らの敗北、つまり死を受け入れている

様に見えて。

(いや、です……………!)

——無我夢中で、その言の葉を口にした。

「
↓
」
鬼の拳が体に届く直前、春姫の声と共に小次郎の体が光った。

自らの限界を超えた魔力の鼓動は体の周囲に淡い光を伴わせ、早く暴れさせろ、とばかりに力の行き場を求め弾け、荒れ狂う。

瞬時に体制を直しバク転、つま先に先ほど落ちた鞘を引つ掛け、一気に蹴り上げる。

『グオオオツツ!?!』

途轍もない速度で飛来した鞘が鬼の顎に激突、めきめきと音を鳴らす。

数瞬前と逆転した形勢と体制。

鞘の鎧に強かに顎を打ち付けられた巨体が僅かに浮いた。絶好の隙。

小次郎、腰だめに折れた太刀を構え、呟く。

「鬼殺し」

一閃。

横一文字に振り抜いた太刀は風を切り、鬼を斬った。

音は静かに、鬼怪物の体は腹部から両断される。

どうと倒れた上半身の向こう側、大地に強く根を張っていた大木達は皆一様に切り株となっていた。

(ああ……………)

振り向いた顔はいつも通りに涼しげで。

さっきまでの死闘なんて全く伺わせなくて。

あの日、神社で当たった木漏れ日に似た柔らかな笑顔で手を差し伸べてくれて――

この日、サンジヨウノ・春姫は英雄キロに出会った。

「小次郎さまっ、小次郎さまあ……!」

先ほどから春姫は小次郎の腰に抱き着き泣きじやくつている。

小次郎は少し困ったようにしていたが、やがて静かに春姫の頭を撫でてくれた。

「泣くのは構わんが、いつまでもそのままだとお主の綺麗な顔が汚れるというもの。いい加減私の甚兵衛で涙を拭くのはやめておけ」

「うううう……」

小次郎にやんわりと諭され、ようやく春姫は涙を落ち着かせた。

しばらくして、聞き慣れた声が二人の耳に届いた。

「おーい小次郎……ってやつば酷い怪我じゃねえか!!」

「兄様ー!にいき——兄様!?!やつぱり一人で無茶したんですね!?!」

「なんで一人で行ったんだ!」

「小次郎さん……!だ、大丈夫ですか……!?!」

上から神社に住んでいる神のタケミカツチ、人間の命、ヒューマン桜花、千草だ。

「仕方なからう、お主達は働きに行っていたのだからな。暇だったので春姫の屋敷に忍び込んでみた所、春姫が攫われたと気づいたのだ」

「え、ま、待つて下さい。私、攫われた訳ではないのです。お客様の神饌を春姫が食べてしまつて……それで、その」

「あー、いいぞ春姫。後はコイツに喋らせるからな」

「……?」

小次郎の弁を春姫が正そうとした所、タケミカヅチが背後から一人の男を突き出した。

「な、何を言っているんですか、神タケミカヅチ。僕は勘当されて身寄りのなくなつた春姫ちゃんを引き取つてあげようと……」

「えっ……!?!」

それは先程春姫を置いて逃げ出した小人族バルクムの役人だった。

逃げてきた所をタケミカヅチ達に捕まつたらしい。

タケミカヅチは命達から白けた目で見られている役人を見下ろし、言った。

「ああ、知ってるさ。ただ『色々』聞かせては貰うぞ?心配すんな、お前の言う事は信じよう。神に嘘はつけないからな」

そのとてもイイ笑顔に役人は白目を剥いた。



「……………はあ」

社の一室でタケミカツチは溜息を吐いた。

依然生活が苦しい事に変わりはないが、それでも子供達は前より一段と仲が良くなった。

特に春姫。最近はもう小次郎に耳としっぽをびこびこブンブンさせてべったりだ。

そのせいで最近命ミコトが怖い。

この前なんか春姫が何を思ったか「負けませんからねっ」なんて言い出して大変だった。

タケミカツチと小次郎は揃って首を傾げたが結局何の宣戦布告なのかは判明しなかった。

だが、だからと言って春姫と命の仲が悪いかと言われればそんな事は全く無く、寧ろお互いを親友と言っていたので、余計な心配は無用だった。

閑話休題。

ではタケミカツチが何を悩んでいるかと聞かれれば、それは別の所にある。

役人の事ではない。彼はあの事件の後、タケミカツチが少し「おOHANASHI話」したら直

ぐにボロを出したので、無事にしよつぴかれた。やり口がかなりのゲスさだったのでスツキリした。

春姫の父親に事の真相を告げた所、泣いて春姫に謝りながらタケミカツチ達——特に小次郎——に礼を言っていた。そのおかげで春姫が神社に遊びに来る事が公認されたので、春姫は余計にはしゃいでいる。

また閑話休題。

タケミカツチが目下頭を悩ませているのは——

「……………ま、俺一人で悩んでてもしやあねえか。どうせ金を稼がなけりやいけないんだ。皆に相談して、それから決めよう。」

——オラリオに行くかどうか」

片方の悩みだけを口に出してタケミカツチが部屋を出る。

部屋の机には、一枚の紙が置かれていた。

|||||

ササキ・小次郎

L v. 1↓2

力： I 0

耐久： I 0

器用： I 0

敏捷： I 0

魔力： I 0

暗殺者： I

《魔法》

〇

《スキル》

【宗和の心得】

- ・ 攻撃が見切られなくなる
- ・ 互いに初見の戦いを強いられる
- ・ 対象との初戦闘時における経験値ボーナス (×1.2)
- ・ 全戦闘行為における獲得経験値の最低値を種族を含むその対象との初戦闘時の値に
固定

|||||

タケミカツチはあの後、帰ってきて直ぐに小次郎に頼まれステータスを更新した。

所用期間、五時間。

——これは、歴史に残らない世界最速。
レコードホルダー